

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）  
（総括）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究  
課題番号：H30-エイズ-一般-003  
研究代表者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によって HIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。30 年度の研究成果として、①拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製に着手、②愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査（アンケート）、③福祉療養施設への出張研修、意見交換を計 3 施設で医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向し実施、④地域で HIV 診療に関する実践的なポケット版小冊子の作製（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）し四国の主な HIV 診療施設に配布、⑤在宅介護職員に当院での HIV 患者の実施研修（外来、病棟）を計 3 回実施し、地方での HIV 診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつありさらに四国全体に広げていくことを計画している。

**研究分担者**

武内 世生・高知大学医学部・准教授  
末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師  
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長  
若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師  
中村美保・高知大学医学部附属病院・看護師  
小野恵子・愛媛大学医学部附属病院・総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー

**A. 研究目的**

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 170 名以上の患者を治療して

いる。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が 17 施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が 29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者の HIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多

い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV 感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。また、高齢化と患者数の増加にて同様の背景である高知県の拠点病院も研究対象として活動していく計画である。さらには、次年度には徳島県、香川県にも研究への参加を促し、ブロック拠点病院が存在しない四国地区全体の HIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行していきたい。

HIV 感染者・エイズ患者に対する中核拠点病院としての機能的な運用と診療体制の整備を目的に挙げ、平成 30～32 年度の 3 年間で研究を行う。なお、愛媛県保健医療対策協議会（会長：村上博県医師会長）、愛媛県および高知県庁の各健康増進課、および NGO 団体 HaaT えひめ（代表：新山賢）には、一連の研究に関して、相談、意見聴取に了解のもと参加いただいた。さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域の HIV 診療の充実に努めたい。

## B. 研究方法

【研究 1】拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製  
愛媛県および高知県の各拠点病院の HIV に関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得て HIV 診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加）や各病院にて講演会を開催し、かつ情報収集のため意見交換を行う。また、研修教材の作成に着手する。

【研究 2】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催する。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても啓蒙するとともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことを目的に、研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護について、受け入れ時の支障などに関してアンケートを行う（参加者 100 名程度の予定）。

【研究 3】福祉療養施設への出張研修、意見交換

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を年に数施設単位（各参加者 30～100 名程度）で行う。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義をし、かつ各出張講義の終了時に全参加者に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行う。

またこの講義の理解度・感想も確認する。なおそれらの意見を、介護用の小冊子（研究4）にも反映させる。

【研究4】地域で実践的ポケット版小冊子の作製

地方でHIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時のHIV感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット小冊子（18x10cm大程度の予定）を作製し県内および四国の主だったHIV診療施設に配布する。

【研究5】在宅介護職員の実施研修

HIV患者の介護に直接あたってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、県内の在宅介護職の看護師に各々1週間ずつ研修会として、当院のHIV患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を年に数回行う。なお、拠点病院からの実施研修も併せて募集する。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

### C. 研究結果

【研究1】

愛媛県および高知県の各拠点病院のHIVに関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得てHIV診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加し討論）を平成31年2月7日に開催した（四国の連携のため徳島県の医療スタッフも参加した）。研修教材の作製に着手した。また、

次年度に向けて四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行うために、綿密な打ち合わせを行った。

【研究2】

県内の高齢者施設から現場の介護・福祉担当者に参加してもらい、HIV感染症等に関する研修会を平成2月27日に開催した。研修会時にHIV感染者の福祉・介護についてアンケートを行い（参加者71名）次回の諸資料の参考にする事とした。

【研究3】

HIV感染者の増加に対応するため積極的にHIV感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を計3施設で行った（各参加者20~87名、計173名）。当院から医師・看護師・薬剤師・MSWのHIV診療チームとして出向した。

【研究4】

介護時のHIV感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や針刺し事故時の感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット子（18x10cm大程度）を作製し県内および四国の主なHIV診療施設に配布した。

【研究5】

県内の在宅介護職の看護師に各々1週間ずつ当院のHIV患者の実施研修（外来、病棟）と講義・討議を計3回実施した。

### D. 考察

地方における病院・介護施設間のHIV診療連携として愛媛県と高知県をモデルに、地方におけるHIV診療および介護連携に関

する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後の HIV 感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では平成 30 年末現在累計 170 名以上の HIV 診療経験があり（県内の大半の HIV 診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV 感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年 10 名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢の HIV 感染者が多く見られ HIV 診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢の HIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成 30 年末現在 50 歳以上の 8 割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、各拠点病院と長期療養患者を受け入れ得る介護・福祉施設間の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計 3 施設の病院・介護療養施設などへ直接出張講義を HIV 診療チームとして行った。その結果、介護や福祉環境を要する HIV 患者の受け入れが円滑に行い得る施設が増加した。このように、直接に行う出張講義は積極的な連携の 1 方法として意義が高かったと考える。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良・開発が年々進んでいるものの、今後 HIV 感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継

続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ、今後の 1 課題として、まず四国地区に応じた実践的な（事前評価委員からのコメント・助言も参考にし、針刺し事故時の対応方法および配備薬剤も具体的にどの病院に備わっているかなど、どの地区においても素早く対応ができるような内容も含めて）抗 HIV 薬および併用薬に関する資料を作製した。

なお、これらの実践的な出張研修は、エイズ学会雑誌に投稿し査読の結果、掲載され、学会報告とともに、文体として全国に発信できたことも意義深い。

いずれにしても HIV 患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各地域・病院において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。また、今年度愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催し HIV 感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い（平成 31 年 2 月 27 日開催）。さらにより具体化した HIV 診療体制の充実をめざし、今年度は地方で実用的な（愛媛や四国の現況や最新の治療法、感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット冊子を作製・配布した。このポケット冊子に関しては、事前評価委員からも面白いという意見・評価もいただいております。今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

また、愛媛県ならびに高知県に加え今年度は徳島県とも福祉連携体制などについて十分討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV 診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような四国地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が1人では送れない HIV 感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要があると考える。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

## E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために高齢介護施設の介護・福祉担当者への講演会、さらに積極的に出張講義、ポケット版小冊子の配布などを行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

## F. 健康危険情報

該当なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

1. 日本エイズ学会誌、20(2):155 -159,

2018、石川朋子、末盛浩一郎、小野恵子、滝本麻衣、若松綾、中尾綾、乗松真大、木村博史、井門敬子、高田清式、安川正貴：愛媛県におけるエイズ診療地域連携を目指した研修会の評価—アンケート調査による研修会有用性の検討と MSW の役割—。

2. International J STD & AIDS :doi: 10.1177 /0956462418795580,2018、Okazaki M, Okazaki M, Nakamura M, Asagiri T, Takeuchi S: Consecutive hypoglycemia attacks induced by co-trimoxazole followed by pentamidine in a patient with acquired immunodeficiency syndrome.

3. American Journal of Infection Control 46: 462-463, 2018、Matsushita M, Takeuchi S, Kumagai N, Morio M, Matsushita C, Arise K, Awatani T: Booster influenza vaccination confers additional immune responses in an elderly rural community-dwelling population.

4. International Journal of STD & AIDS 29: 834-836, 2018、Okazaki M, Nakamura M, Imai A, Asagiri T, Takeuchi S: Sequential occurrence of Graves' disease and immune thrombocytopenic purpura as manifestations of immune reconstitution inflammatory syndrome in an HIV-infected patient.

5. J Infect Chemotherapy 24(12): 1024-1025, 2018、Watanabe H, Mizuno Y, Kikuchi H, Miyagi K, Takada K, Mishima N, Okoshi H: An attempt to support by the Japanese society of travel and health for increasing travel clinics.

6. Journal of general and family medicine 20: 13-18, 2018、Matsumoto K, Takeuchi S, Uehara Y, Matsushita M, Arise K, Morimoto N, Yagi Y, Seo H: Transmission of Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* in an acute care hospital in Japan.

## 2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と ART 後の変化、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月
2. 末盛浩一郎、小野恵子、若松綾、中尾綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、乗松真大、木村博史、田中景子、山岡多恵、井門敬子、竹中克斗、高田清式、愛媛県の各医療機関における HIV/ AIDS 研修会後のアンケート調査を介した意識調査の比較、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月
3. 中尾綾、末盛浩一郎、山之内純、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンプ リング課題-Net Score で評価して-、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月
4. 岡崎玲子、蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、林田庸総、岡慎一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、加藤英明、石ヶ坪良明、中

島秀明、吉野友祐、太田康男、茂呂 寛、渡邊珠代、松田昌和、重見 麗、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における 薬剤耐性 HIV-1 の動向、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月

5. 中村美保、前田英武、西田拓洋、岡崎雅史、四國友理、朝霧正、坂本紗友里、武内世生：他機関の連携による短期記憶障害患者の在宅療養移行支援。第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月
  6. 中村美保、前田英武、岡崎雅史、西田拓洋、四國友理、朝霧正、坂本紗友里、武内世生：エイズケアチームが関わった 1 症例 ～短期記憶障害患者の在宅療養移行支援～。第 16 回日本医療マネジメント学会高知県支部学術集会、高知、2018 年 8 月
  7. 木内英、谷口俊文、猪狩英俊、高田清式、高野操、菊池嘉、岡慎一、日本における HIV 関連神経認知機能障害 (HAND) の有病率および関連因子 (J-HAND 研究報告)、第 92 回日本感染症学会学術講演会、岡山、2018 年 5 月
  8. 末盛浩一郎、村上忍、松本卓也、宮本仁志、長谷川均、安川正貴、フルコナゾール耐性播種性クリプトコッカス症にボリコナゾールが奏功した 1 例、第 92 回日本感染症学会学術講演会、岡山、2018 年 5 月
- H. 知的財産権の登録状況 (予定を含む)  
該当なし